森林レンジャーがゆく（113）

仕方なく、森林に柵

あきる野でニホンジカ（以下「シカ」という）が増え続けています。これは21世紀に入ってから、全国の広い範囲で個体数が急増したことに伴う分布拡大が要因の一つです。

シカにとって草原は絶好の生息環境ですが、もちろん自然林やスギヒノキ植林などの環境でもシカは生息できるため、全国的に適する環境が見られます。以前は自然観察でよく訪れていた市外の草原系の山地でも、数十頭から数百頭のシカを何度も目撃しました。市内においても10年前から既にシカの増加を確認し、近年は多摩川で調査中に近くの丘陵地帯から鳴き声が聞こえることもありました。

ところで、自然草原があまり見られないあきる野では、植林の伐採跡地や幼齢林が草原に代わる環境となっています。これらの伐採跡地などは近年で多少増加し、自然の多様性が高まる一方で、その周辺でシカが多くなってしまうことがよくあります。そして、シカの増加による食害などを受けて、あきる野では伐採作業が行われた植林地の一部で、２０２０年からシカの侵入防止柵が設置され始めました。これにより、柵内で植樹されたものの植生環境を守ることができると同時に、周辺のシカの密度の上昇をある程度抑えられます。

実は、子どもの頃から母国スペインでも私有林などの山地で、この様な柵に囲われ、管理された場所をよく見ていました。最初は、生き物の自由や多様性を制限する、よくない支障物だと思っていました。しかし、増加しやすいシカやイノシシなどの動物が、これらの柵によってコントロールされていると気付きました。また、人もあまり出入りしないため、希少な動植物の保護に役立つ場合もあり、いい面もあると思うようになりました。実に複雑な想いです。

そもそも鳥獣の一部が不自然なほど増加した要因の一つとして、人間がオオカミや大型猛禽類といった生態系において必須な捕食者を絶滅や減少させてきた影響が考えられ、その結果としてシカやイノシシなどによる被害が重大な課題となっています。

様々な見方がありながら、現時点では農地と同様、これからの日本の森林や自然保護に柵は欠かせない存在になるかもしれません。

（パブロ）

市内の植林地で見られるようになった侵入防止柵（今年３月に撮影した様子）